



私の街のすてきなお店



理事 土屋 みどり

青梅市は、JR新宿駅から電車で1時間のところにあり、東京とは思えない豊かな自然や文化財も多く、歴史と文化が感じられる町です。

鎌倉時代から続くとも言われる青梅市の繊維産業。大正末期から昭和の時代に、絹織物や木綿夜具地を中心とした一大織物生産地となりました。昭和20年代の最盛期には全国シェアの60～80%を占めていたとも言われる「青梅夜具地」、その後も暮らしの必需品として庶民の生活に長く根付き、座布団や布団カバーに使われていました。

ナイロン・ポリエステル等の新繊維の実用化、生活の洋風化から織物産業は衰退していき、残念ながら「青梅夜具地」は現在生産されていません。しかし、歴史が感じられる“のこぎり屋根”の織物工場跡は、青梅市の調布地区のところどころ、私が園長を務めるちがせ保育園の近くにも残っています。

青梅の繊維産業は長い歴史を持ち、150年にわたり大切に受け継がれてきました。現在も産業として残っているタオル作りは50年以上続き、細い糸を密度濃く丁寧に織り上げる絹織物特有の高度な技術と、秩父山系の伏流水を豊富に使った染料技術が息づいています。企画・製造・販売100%純国産、東京生まれのタオルは吸水性抜群で上質な一枚です。色落ちしにくい性質を持つ特殊な染料で染めた色物、使い心地が良く丈夫で長持ち、私のお気に入りです。

JR青梅駅から旧青梅街道に出て、坂を下り多摩川を渡り、南に5分ほど歩いたところ、“のこぎり屋根”をリフォームした工場が立ち並ぶ一角に、すてきなタオルのお店があります。多摩川の清流と美しい自然に恵まれた青梅の地で作られているタオルを扱っており、今では全国に店舗があるようです。

他にも地場産業として番傘の製造がありました。多摩川手前の旧青梅街道一帯は「青梅傘」の一大産地であったと言われています。傘地の裾に数本の糸を入れて補強する等、丈夫な作りが特徴です。傘に張られた和紙に名入れのサービスも行っていたので、江戸っ子に人気があり、御岳山の御嶽神社へ参拝する道中の青梅で傘の名入れの注文をし、帰りに受け取る人も多かったそうです。

「青梅傘」の製造販売を行っていた傘店で残っているのは一軒だけ。創業は遡ること約160年の天保年間。現在は本格的な長傘や軽量傘、晴雨兼用、ほぐし織り、ブランド傘、さらには今話題の多間傘等扱っています。子ども用の傘も充実しており、店内の一角にコーナーを設けるほどの幅広いラインナップです。ちがせ保育園の保護者会では、小学校の入学祝いとして、こちらの子ども用の傘に名入れをして卒園児に贈っています。昭和のレトロな雰囲気を色濃く残す商店街にすてきな傘店、いつお邪魔しても自分の気に入るものに出会える私のお気に入りです。